

## (特別講演)

## — 合板業界の現状と将来の見通し —

二平合板社長 村上博之

(講演要旨)

(司会者) 只今から御講演をお願い致します村上博之氏を御紹介いたします。

村上氏は東京大学法学部御出身であります。昭和21年佐伯に合板会社を設立され、戦後の困難な時代を、この事業のためにおひらきになりまして今日に至っております。皆様御存知のように、今日では九州は勿論全国でも有数の大きな合板会社にお育てになっております。その間外国にも数回お渡りになり世界各国のその方面の事情にも非常に明るく、指導的な立場の方でございます。そこできょうは「合板業界の現状と将来の見通し」というテーマでお話をお願い致します。皆様方の御清聴をお願いいたします。

(村上博之社長、講演)

只今御紹介にあずかりました二平合板の村上でございます。本日は九州の林学会を開催せらるるに当り、私のような者に講演の機会を賜り之程の光栄はございません。子供の頃から親父の下での門前の小僧で育ち之からも一生この木材利用の道一筋に進ませて貰うつもりでございます。実は昨日もある所でヨーロッパやソ連を廻ってきた漫談をしてみました。諸先生方の前で然も自分の仕事の話をするとなると、いい加減なよた話ですませるわけにもいかず、話をお引受けしていらい頭が重かったわけですが、といてうんと勉強し準備すればよいものを、暇がない暇がないといて只今に至ったわけでございます。之から約2時間許りお聞き苦しいとは思いますがあしからず御聞き取りの程御願ひ申し上げます。時恰かも本日は日本シリーズ巨人ロッチェ戦、頃はよし土曜日半ドン、テレビはそこにある、というわけで、私の肩の荷も重うございますが、眠くなられた方、つまらんと思われた方は、遠慮なくテレビの方へお運び願ひしたいと思います。

さてこの合板でございますが、エジプトメソポタミヤの頃から思想としてはあったわけございまして、日本でも正倉院御物の中の螺鈿細工や飾り板等にして

も合板と云えば云えるわけでございます。然しながら産業としましては1900年代ドイツ、アメリカ等で発達し今日に至っております。日本では明治37、8年頃名古屋の方で始まり大正を経て昭和に至り相当な物が出る様になりました。難しかったのは耐水性の問題であります。戦前は大豆グルーで接着していました。之は着くことはよく着きますが、雨や水によって剥がれるという欠点がありました。ただし当時でも耐水性のある接着剤はなかったわけではございません。飛行機のプロペラは御承知の様にみな木製で当時でも一本の木でプロペラになるような歪のない木はないので、全部合板で作ったわけでございます。縦横十文字に何枚もの木をフェノール樹脂でひっつけ、戦闘機爆撃機のプロペラを作りましたが、飛行中バラバラになったという話はございません。又輜重車の轍が積層材で作られた時もございました。今でもフェノール合板というものがあり私共でも大量作っていますが、耐水性耐久性のすぐれた良い接着剤でございます。唯大量生産するにはいろいろ問題が多く、作者としては余り歓迎はしておりません。

戦後合板の発達は何と申しましても尿素樹脂のおかげでございます。肥料でおなじみの尿素とホルマリンをタンクに入れ混合して出来る接着剤でございますが第一之は非常に安い、第二に大量入手出来る、更に減多なことで剥げないということで、現在合板の大半は尿素接着剤で作られています。特に之以上の耐水性を要するものはメラミンを入れますが之をタイプ1と称し雨戸等水の当る処に使用しています。私の家庭でも風呂の蓋は之です。5、6年たち木の方がボロボロになっていますが、接着の方はビクとも致していません。

一時ベニヤと云えばインチキ物の代名詞の様になっていましたが、今日では建築材料や家具の各面で、非常に安く無くてはならぬものとなり、欧米にも輸出され、今やその量と質において世界に冠たる評価を得る

に至っています。

この質の面でございますが再三にわたる欧米旅行での私の見聞を申し上げますと、アメリカの会社ではどちらかと云えば単一製品或は同じ傾向の商品を取扱っていますが、英国では世界各地の合板全部が一商店一会社の倉庫の中に展示しております。英国は全木材関係製品の97%を輸入して居りますので、世界中の製品が一ヶ所で見られるわけですが、外観がツルツルしている状況、節割れ、中板が隙間になっているトンネルの有無、切り口の美しさ等日本品は断然他国品を圧倒しております。日本の合板は世界一の品質といえましょう。

次に量の面でございます。今次々に表をお示しますが、合板製造量では日本は米国に次いで二番目でございます。一人当たり使用量もアメリカの方がやや多うございます。ところが日本の合板は2.7耗のものが多うございますがアメリカの場合は9或は10耗少く共6耗以上の厚い合板を使っていますので広さで云えば日本の方が多くなっているのではないかと考えられます。

現在世界に誇る日本の産業として時計、カメラ、テレビ等電機製品、最近では重化学製品とありますが、世に知られていない世界一の商品として、ベニヤ板がある云うことをこの際皆様方関係のある諸先生方には、是非憶えて戴たいものであります。

以上が前置きでございますが、之から所見を二、三申し上げたいと思います。

戦後の急速な経済成長下、建築建設の増加拡大に伴い鉄・セメント等の基礎資材は勿論、木材需要も非常に増えましたことは、皆様御承知の通りでございます。昨44年には、9557万 $m^3$ 、つまり約1億 $m^3$ の木材を消費致して居ます。親父から子供の頃憶えさせられたことに米は年間一人一石、木材も一人一石、一億人で一億石ということがありますが、現在ではこの3倍或は3.3、3.6倍になっているのでございます。表1にありますように昭和40年に7,000万 $m^3$ のものが昨44年には9,570万 $m^3$ 、その中で合板は、7.4%のものが11%1割を超える状況になっています。当然ベニヤ用原木も非常に増えているわけでございます。製材用が一番多く60%に近く、パルプ用も増えていますが、之は雑木、針葉樹等国産材の割合が高うございますが、合板用についてはその殆んどを輸入に頼っている状況にあります。北海道、東北の一部に国産材を使っている工場がありますが、之とても北海道内工場の半分はラワン等南洋材を使用する様になってきています。

ともあれ昨年総使用量9,560万 $m^3$ 中国産材4,680万

$m^3$ 、輸入材4,880万 $m^3$ であり本年の輸入は5千数百万になりましょう。国産材の之以上の増産は考えられませんので、昨年50%を越えた輸入材は本年、来年と60%を越すことも近いことは間違いありません。大変な輸入量となってきているわけでございます。

ところが皆様御承知のように日本は有数の工業国になってきておる。国民総生産は今や自由世界2位、ロシアを入れても3位となり、一方之に附随していろいろ社会的政治的問題も生じている状況にあります。さて然らば工業国たり得る原料に何があるか、之はまた何も無いのであります。探せばまあセメント原料の石灰石ぐらいで、皆様方のサルマタから洋服、ネクタイ、目鏡果てはこの椅子に至るまで日本人の手では作られています。日本の土地から産出されたものは殆んど無い、と云っても過言ではございません。本物の日本製は、裸になった皆様方の体だけでございます。之もこの頃では混りものが出来ているかも知れません。食べ物まで輸入され混ってきている状況でございます。とにかく原料は100%輸入と考えて間違いない、だから日本人は余程性根を据えて働かねばならない、と云うことでございます。アメリカとかロシアでは、今以上の生活をしようとすれば、これはまあ余分に働きいろいろと智恵も出さねばならぬでしょうが、唯衣食住ということになれば、ちょっと食べたい時に「ココロレワンワン」で小麦を作る、そこを掘れば石油が出るということで、いわば家庭菜園のナッ葉を摘んで食べる要領で、産業が成り立っている国ではないかと思えます。ところが日本の場合吾々の生活を維持するためには先づは原料を輸入しなければならない、大切なことは、輸出でなく輸入であります。よく云われていますように、マラツカ海峡が開鎖されたならば、勿ち明日の生活が困る、明後日の生活はない、と云うことでございます。本日は貿易の話をしに来てはいるわけではございませんが、親父以来十年以上も大分県貿易振興会長をやらせていただいていますので、皆様方にもつい話したくなるわけでございます。とにかく輸入するためには買はねばなりません。その為にはアメリカ人やロシア人より余計に働らいて自分で使うものは自分のものとし、買う原料の分は余計に働かねばならぬ、という宿命にあるわけでございます。輸入原料を加工し、高い値段で売って、一つ売って九の生活を維持する、ということになります。之が嫌なら只で原料を海外から持って来ることを考えなくてはならぬ、之も方法はある。武力を蓄え力づくで持ってくるということに相成るが、この方法は余り得な方法でないと思

みて経験したばかりでございます。

本題に戻りまして、そこで日本の貿易ということになるわけでございますが、戦前皆様方が学校のとき、輸出は生糸、綿織物、輸入は当時でも石油であり、鉄鉱石、綿花、羊毛でありました。表2の通り、現在でも輸入はその通りでございますが、昭和35年の順番では、石油、綿花、羊毛、鉄鋼、屑鉄、鉱石、小麦、木材と並んでいます。ところが昭和41年からそうでございますが現在44年では、石油の次が木材でございます。始めは石油の14億ドルに対し7億ドル足らず半以下で、鉄鉱石が6億トントでしたが、昨年度は石油23億ドルに対し木材13億ドルと半分をはるかに越え鉄鉱石は10億に足りません。現在この大分におきましても、何んと云っても大きな問題は鶴崎の新日鉄進出の問題であり、この業界は、八幡、富士、鋼管、住友、神戸、川崎と大会社が並び、一たび何かあれば新聞第一面をにぎわすということになります。之と比較し木材は、原料鉄鉱石をはるかに超える13億ドルの輸入を行い、又更に、鉄鉱石が全量輸入であるのに対し、一昨年迄は輸入以上の内地材を使っていた、昨年は輸入が国産材を超えましたととにかく、之だけの国産材の他に、之だけの輸入をしているという基礎資材は外にございません。この一事を以てしても如何に木材関係の産業が大きいものであるかお判りいただけると思います。

この輸入材でございますが、まあ大きく南洋材と、その他の米材、北洋材、ニュージーランド材等とに分けられますが、その過半は南洋材でございます。この南洋材の一番大きな消費先はベニヤ板であります。

即ちこのベニヤ板の仕事は、本来昔の綿紡或は毛紡に匹敵する大きな仕事でございます。例えば私共二平合板は全国合板会社の中で5、6、7番目位にありますから、十大紡の中の例えば敷島紡さんとかまあそういうところにおられるわけでございますけれども、甚だ残念なことながら私共自身にそういう自覚が足りない、又世の中の人々もそのように評価していただけないという状況でございます。新聞等も近頃多少はやれ値下りだ値上げだと取上げる様になりましたが、どうも私共の勉強も足りないし、甚だ失礼乍らわが林学諸先生方のP・Rは充分とは申し難いのではないかと考えています。

そこでこの合板産業でございますが、順調に今日に至っています。と申しましてもいろいろ波乱もありました。之からも住宅需要の増加につれますます伸びるであろうと云われており、私も間違いなく伸びると思

っていますが、之から申し上げるような幾多の問題が残っております。

先ず現状でございますが、先程は原料素材である木材についてのべましたが、合板の実績の方を申し上げますと、表3のように昭和40年に4耗換算657百万 $m^2$ を出しています。4耗換算は現在では実際的ではありませんが昔は4耗厚さの3尺6尺が標準でした。今では私共メーカーも悪いが、使はれる方も安い方が良いということで段々薄くなり、蚊帳の様に薄いベニヤがないわけではありませんが、慣習として4耗換算で統計を作っています。

その様な数字で40年は6億6千万 $m^2$ 弱のものが、44年には15億 $m^2$ の合板が作られています。この5年間で倍になったわけでございます。本年は1月から6月迄に8億4千万出来ていますので年間17億 $m^2$ になるものと思われませんが、その増加は目覚ましいものがございます。

この合板の使われる分野も次第に変わってきました。戦後復興に際し先ずベニヤが使われましたけれども之は悪い面もあり、例えば永井荷風の作品で、ベニヤ板越しに隣りのゴソゴソやっている話が聞えるとか、それを節穴からのぞくとかいう小説が風靡した時がございます。このように生地 of 合板が永い間使われてきましたけれども、今日では眼に見える所に使われることは非常に少なくなってまいりました。僅かに押入れの中とか裏側の見えない処に使われ、見える処は化粧した二次加工合板がなっています。先程の15億弱の合板中、その4分の1の3億8千万 $m^2$ がこの二次加工合板になっています。とすれば生の合板が4分の3もあるのかと思われるかも知れませんが、之は4耗換算のため、このようになるので、之から申し上げる厚い板で出来たコンクリート型枠が非常に多くなってきているからでございます。

このコンクリート型枠でございますが、例えばこのビルディングを作るとき、セメントを流し込む型枠で、ついこの間迄は杉、松の板を枠組み釘打ちして3ヶ月位使い、こわれると捨てるという方法でございました。手前味噌になりますが、10年位前から私共の方で接着剤が良くなったのだから合板で使える、アメリカでも合板でやっているということで皆さん使いなさい使いなさいと作っていたのですが仲々流行しませんでしたところ、3、4年前頃から枠組み釘打ちの手間、労働力が足りなくなったこと、一方建築需要が爆発的に増したことから、高い安いでなく、とにかく期日に間に合わせる事が先決という事になり、規格化され

た3×6, 2×6, 4×8尺の合板なら大体同じものが手に入るということと相俟って、非常に多く使われるようになりました。この厚さが12耗でございますから4耗換算の場合3倍の数字になって計算されるわけでございます。広さで言えば二次加工品は過半数を占めているのではないかと思います。

次に合板工場がどの位あるかということになりますと、之が又非常にややこしいのでございます。いろいろのものを混ぜ混ぜに作っている工場、台板を買ってスライス単板を貼っている工場等がありまして、二平合板とか段谷さんとかの様にはつきりしている工場は一部でございますが、昭和44年度末で、普通合板工場が209工場ということになっております。戦後昭和25、6年頃でも200から300と言われていましたが之は、特に名古屋、静岡という所で、殆んど家内工業的に丁度山元で丸鋸一丁で製材所をするように、ロータリーを持ち込み、単板をむいて、天日に乾かし、米粒ではないけれども、接着剤で貼りつけるという工場も入れている数で、現在の209工場というのは一つ一つがいわば工業的な生産工場が殆んどでございます。それから普通合板と二次加工合板と両方やっている工場が69、二次加工だけの工場が334、とこういう数字になっておりますが之は米国に次いで世界第二の数字でございます。

この世界に於ける地位でございますが、ちょっと古い統計ですが次の表4を見ていただきたいと思えます。古いと申しまして、国際連合の下部機構であるFAO食糧農業機構からつい数日前に私のところに送ってまいりましたもので、この数字は日本の中では最も新しいウッドベースプロダクツの数字でございます。と申しますのも、2年前木材加工業の日本代表としてFAOの会談に出席致しましたので、この様な統計表を送ってきている次第でございます。この統計表を見ますと1955年、60年、65年の合板パーチクルボード、ファイバーボードこれはハードボードのことでございますが、FAO加入国は勿論中共等未加入国も推測で書いてございます。この単位がややこしいわけでございますが、合板は1万 $m^2$ 、パーチクルは1万トン、ファイバーボードは1万トンでございます。とにかく数字で見えますと、65年で多いのはカナダ合板で740となっておりますね。米国680、英国159そして日本が243となっております。1965年は昭和40年ですから先程申し上げた様に現在では日本は倍になっておりますから、460乃至480というのが今日の姿ではないかと思えます。ところが更に先程申し上げた様に日本のペ

ニヤはアメリカの3分の1の厚さでございます。この数字3倍いたしますと730となり広さ枚数ではアメリカより多い、少なくとも殆んど変らない。人口は日本の倍である、とすれば一人当り合板使用量は、日本はアメリカ以上であるということになるわけでございます。唯合板以外の木質板の使用量については、原料入手事情等の関係もあり、日本は低くなって居り特にヨーロッパ諸国が高くなっています。

一方アメリカは、表5の如く大量の合板を輸入いたしています。之は原料立地条件、日本は東南アジアに近いということと、合板工業は附加価値労働生産性が低い産業であるということと相俟って、アメリカ輸入合板の中昭和34年には日本はその61%を占めていました。それが、昭和44年には18.7%になって居るのでございますが之は全く同じ理由により、更に有利な開発途上国である韓国、台湾が大きく台頭してきたということとでございます。44年には両国合計60%と日本に置き換っている状況でございます。のみならず、日本の両国からの合板及び単板の輸入量さえ、表6に見られるように急増しており、特に昨44年から本年当初にかけて、日本に於ける合板不足と値上りは、本年1月から7月迄に実に70億円に相当する輸入が行なわれたのであります。実は之がわが合板業界が直面している基本的問題の一つであります。

基本的問題と云えば、もう一つ原木の問題がございます。表7に明らかなように、従来その大部分はフィリピンから輸入してきましたが、同国の輸出政策と、先に申しました様な日本の需要増大と相俟って、南洋材の入手先が、インドネシア他の比重が高くなって居ります。同時にフィリピン材と異り、材質品質の低下の問題も、絶対量確保の問題と共にわが合板業界にとって、由々しき問題となってきております。開発途上の之等新興国では、地図を見せて貰っても海岸線の一部が載っているだけで、奥の方はさっぱり判らぬ状況でございます。本年始めて林野庁林産課の人がインドネシアに行かれましたが、之迄林野庁から一人も行かれたことはございません。先程申し上げてのように、石油に次ぐ輸入品である南洋材確保について、国としては勿論又学者としても、余りにもおそろかにしすぎているのではないのでしょうか。もちろん諸先生方の中には非常に詳しい方も居られるし、私共かねて師事している先生も居られますが、木そのもの、土地そのものについては、私共のようないかげんな商売人や私共以上に損得だけ、人を騙してでもといった、程度の低い人々に任せられている状況にあるのでござ

います。私共でも毎年林学系の学生さんをいただいていますけれども、その必須科目に南洋材熱帯樹に関する科目がほしい、鹿児島大学には項目はあるようですが、甲乙丙丁はついていない場合が殆んどの状況でございます。先程来申し上げているような木材業の事情の中で、日本の大学の林学科出身者が、南洋材について知らないということは、全くお話にならないと思う次第でございます。また暴言を吐きましたが、話の行きがかり上、こうなる次第でございます。

もう一つ申し上げさせていただきますと、建築の問題でございます。先程申し上げた様に建築の先行きは非常に希望が持てる。ところが住宅にしても、ビルディングにしても、その素材の種類を握って居られるのは、工学部の建築の先生であります。大震災或は戦争で東京、大阪が焼けた、木材はつまらん材料である。使ってはならぬ材料である、之を我慢して使っているのは木材関係の貧乏人どもが騒ぐとうるさいからである。世の建物は鉄、アルミ等金属と、セメント類で作ればよろしい、ところ諸先生方が思っているように感ぜざるを得ません。例えばモスコウ、パリ、ロンドンの地下鉄汽車の中ではアルミニウムを使っているところもあるにはあるが、たとえば英国の出来たての汽車の中は何か、ベニヤであります。窓枠も木造であります。地下100m、200mのモスコウ地下鉄のエスカレーター階段も側板も木製であります。勿論ベニヤ板は、日本の様に安い安いが主になった、障子紙より薄いマッチでもパツと火がつくような感じのものではありません。少くとも、6ミリ9ミリ12ミリになれば、ベニヤ板は難燃処理をしなくても着火するものではありません。エンパイヤステートビル百何十階目の高い所でも内貼りは皆ベニヤ板であり、パーティクルボードであります。日本の様に不燃材料を使えという規則はない、英国には難燃合板の規準はあるが、日本の様に厳しくはありません。勿論難燃合板は難燃合板として研究しなければならぬし、私共の責任でございます。本年から規則が厳しくなり11階以上の高層アパートには難燃以上の材料を使えということになりましたが、私の考えではその理由が見当たらない。構造が違ってきているのでパツと燃え移らない、しいて言えばダクトを通じて火が走る、或は天井材は問題でしょうね。とにかく、私共メーカーにも責任があるが、一つ林産林学の諸先生方が工学建築の諸先生方に負けないよう、ぐっと頑張ってくださいたいと思っています。之はまたえらいことを申し上げました。

表8の木材需給見通しについては、もう御承知の通

りですから詳しくは申し上げません。

表9南洋材輸入推定量については、先程申し上げたように、今後インドネシヤが増えるがその開発には問題がある、どうしても林学出身の若い方に奮起していただき、進んで一つ現地に行って貰いたいものでございます。

次に表10は、建設省の住宅建設5ヶ年計画ですが41年来着々進行しています。アメリカの年間住宅建築戸数は120万から160万戸でございますので、日本の5ヶ年計画は5ヶ年670万、年間120万戸とアメリカ並の計画でございます。勿論一戸当りの面積、建築費は小さいと思いますが、小なりといえどもこの戸数は世界の驚異ではないかと思ひます。公営住宅、公団住宅等公的資金のものは、もう一つ不足しているようですが、幸い民間建築が増加し、全体としては計画通り進んでいる模様で、更に46年から50年の第2期5ヶ年計画では、何と950万戸1年間200万戸に近いものを建てる計画となっております。

建築資材としては、金物、セメント、木材がその三素材でございますが、建物に占める木材量は断然多く、先般大和ハウスの社長さんと話して居りました時の話では、一見木造風でも、あの建物は柱は鉄、窓枠はアルミサツツユになって居るが、それでも原料費の中では木材関係費が一番大きいと言って居られました。私もそうだと思います。唯そのパーセンテージは、工学諸先生方に押しまくられ低くなってきているのではないかと思ひます。

表11は、南洋材を原料にした商品の価格と $m^2$ 当りの値段を書いて見ました。この価格の取り方には異論もありましょうが、合板というものは、チップに比べたら、価値あるものを作っている、合板は木材関係の中ではまじな仕事をしている、と言えるのではないかと思ひます。

そのほか申し上げたいことは沢山あります。

たとえば、インドネシヤに於ける木材蓄積の問題、その可能性、長期需給見通しと、それに対し実際の動きはどうなるか、之等の問題に触れずにこの話を閉じるのはおかしいのでございますが、その大よそに触れたわけでございます。

又製品輸出はどうなるか、二次加工品はまだ伸びると思ひますが、後進諸国の追上げも激しく、決して容易ではなからうと思われまふ。

特恵関税の問題もいろいろございます。之も輸出が問題で、輸入については、幸い今回は免れましたが、次回はどうか判りません。

又鉄、セメント、プラスチックとの競合問題、或は同じ木材系のパーティクルボード、ハードボードとの競合共存問題もごございます。後者は一見競合するかと思えますが、廃材利用が合板業にとっても、コスト対策上不可欠であること、日本の場合チップの大量需要業界であるパルプ産業が非常に発達していることもあり結局は合板メーカーが兼業でやるか、パルプ業者がやるか、或は多数の製材業者が集ってやることにならうかと思えます。つまり自らの胎内での構造改善であり必ずしも競合関係と考える必要はなからうかと思えます。

いろいろと長い時間申し上げましたが、途中ではまた失礼な暴論も吐きましたが、之を要するに合板業界は、現在の姿になるまで、いろいろ問題もありましたし、之からも又沢山問題をかかえております。その一端を本日申し上げた次第でございまして、他の木材関係産業と共に戦前戦後を通じたえず激しい浮き沈みの歴史を持っています。それだけに、吾々の立場はつらい、きつい、又それだけに他の業種に比べて、吾々は強い、とも云えるのではないかと考えています。労務費、原料の値上りは、他の業種もおなじでございまして。然し売値の性格がちがう、他は、現状維持か、上るかどうか、上らないからきつい、という業種が多い。ところが吾々は上るときより下るときの方が多し、上下の巾が大きい業種であります。その過去の浮沈をのりこえてきた、少々なことではへこたれんぞ、という気持ちを持っているのも事実であります。韓国、台湾との競争もありますが、この経験を活かし、基礎産業関連

産業が発達している日本の環境を利用し、より高級なものを要求する需要に対処していくことに、吾々の進歩も活路もあろうかと存じます。パーティクルボード、ハードボードもその一環であり、プラスチック、ガラス、鉄、セメントも取り入れて木材との複合素材を作り出すことも出来ましょう。又労務費という観点からは、海外進出も起りましょう。米麦の様に政府の保護により、国際価格と無関係に国内価格が決るものとは異り、合板は鉄と同様、国際商品であり、品不足になり国内価格が上昇すれば、海外からすぐはいります。足りないから高くしよう。コストが高くなったから値上げしようというわけにはまいらぬのでございませぬ。その様な事情の中で、品質的にも企業的にも価格的にも国際競争力をつけていこうとしているわけでございます。お役所の方でも今そのためにいろいろ構造改善事業が進められています。吾々も之に協力、努力して、製材からパルプまで木材産業の水平的つながりと、住宅産業としてあらゆる複合材料の結集をはかる垂直的結合を押し進め、合板産業或は木材産業の前途に希望を抱きながら進みたい、かように思う次第でございませぬ。

表12には、昭和50年に於ける木材需要見通しを書きおきました。之についても、いろいろ申し上げたいこともございませぬが、それは一つ云うことより、実行でございまして、そのためには此処に集りの諸先生方の御協力そして御奮励の程を併せてお願いしたいと念願する次第であります。

御静聴まことにありがとうございました。

表1 木材需給の推移 (100万立方米)

林野庁林産課調

年次	需 要					供 給			輸入材 比率%
	総数	製材用	パルプ用	合板用	その他	総数	国産材	輸入材	
昭40	70.5	47.1	14.3	5.2 (7.4)	3.9	70.5	50.4	20.1	28.6
41	76.9	50.4	16.9	6.3 (8.2)	3.3	76.9	51.8	25.1	32.6
42	85.9	55.4	19.3	7.5 (8.7)	3.7	85.9	52.7	33.2	38.6
43	91.8	59.0	20.2	8.9 (9.7)	3.7	91.8	48.9	42.9	46.7
44	95.6	59.5	21.9	10.6 (11.1)	3.5	95.6	46.8	48.8	51.0

表2 主要品目の輸入推移 (100万ドル)

大蔵省外国貿易小概況

		1	2	3	4	5	6	7
昭35	4,491	石油 586	綿花 431	羊毛 265	鉄鋳屑 230	鉄鋳石 214	小麦 177	木材 170
36	5,810	" 722	" 530	鉄鋳屑 387	羊毛 345	" 302	木材 260	石炭 188
37	5,637	" 815	" 388	鉄鋳石 320	木材 316	羊毛 301	石炭 202	小麦 181
38	6,736	" 1,001	" 447	木材 406	羊毛 367	鉄鋳石 356	砂糖 239	" 217
39	7,938	石油 1,154	綿花 439	木材 438	鉄鋳石 420	羊毛 376	小麦 262	非鉄金属 254
40	8,169	" 1,308	鉄鋳石 524	" 493	綿花 442	" 343	非鉄金属 288	石炭 270
41	9,523	" 1,444	木材 677	鉄鋳石 606	" 424	" 420	" 377	非鉄金属 350
42	11,673	" 1,682	" 934	" 718	非鉄金属 589	非鉄金属 488	綿花 443	石炭 401
43	12,987	" 2,100	" 1,161	" 834	" 647	" 591	石炭 518	綿花 511
44	15,024 100%	" 2,298 15.3%	" 1,275 6.5%	" 969 6.5%	" 917 6.1%	" 728 4.8%	" 675 4.5%	" 424 2.8%

表3 合板の生産量 (4%換算100万平方メートル)

農林省調

年次	普通合板	二次加工合板
昭 40	657 ( )	187 ( )
41	775 ( )	236 ( )
42	944 ( )	282 ( )
43	1,186 ( )	315 ( )
44	1,473 ( )	386 ( )
45(1~6)	838 ( )	237 ( )

表4 世界各国合板・パーティクルボード  
ファイバーボード消費量

合板  
パーティクルボード  
ファイバーボード

1万立方メートル  
1万トン  
1万トン 国連FAOによる

	合板			パーティクルボード			ファイバーボード		
	1955	1960	1965	1955	1960	1965	1955	1960	1965
カナダ	400	530	740	8	16	46	117	117	117
米 国	340	470	680	8	19	43	88	97	114
フィンランド	105	142	182	—	62	189	180	140	170

フランス	47	70	93	9	29	80	21	26	41
東ドイツ	22	18	25	23	40	138	14	37	56
西ドイツ	53	101	113	24	96	198	25	43	59
イタリア	28	31	50	6	7	30	7	11	10
イギリス	77	126	159	5	14	41	39	52	60
ソ連	52	59	68	—	5	21	3	10	17
台湾	23	27	30	—	4	20	6	9	8
イスラエル	67	87	127	3	20	60	63	45	37
日本	53	103	243	—	5	14	2	12	27
韓国	4	20	57	—	—	—	—	—	—
オーストラリア	107	127	103	—	6	55	98	107	109

表 5 米国の広葉樹合板輸入 (100万平方呎)

米国商務省調

年次	合計	日本	韓国	台湾	フィリピン	その他
昭 34	1,330	811(61.0%)		37(2.8%)	214(16.1%)	268(20.1%)
37	1,452	740(49.3%)	51(3.4%)	213(14.2%)	214(14.3%)	283(18.8%)
40	2,131	768(36.0%)	337(15.8%)	469(22.1%)	308(14.4%)	249(11.7%)
43	3,805	898(23.6%)	1,166(30.6%)	826(21.7%)	599(15.8%)	315(8.3%)
44	4,290	802(18.7%)	1,590(37.1%)	936(21.8%)	572(13.3%)	390(9.1%)

表 6 合板・単板の輸入

(数量 1000平方米  
金額 100万円)

大蔵省調

年次	合板		単板	
	数量	金額	数量	金額
昭 39	68	76	258	84
40	115	121	304	72
41	416	224	416	85
42	5,290	1,672	5,386	399
43	894	247	6,519	501
44	6,571	2,127	6,814	867
45(1~7)	36,323	6,333	7,290	680

表 7 南洋材の産地別輸入量 (100万立方米)

日本貿易月報による

年次	合計	フィリピン	サバ	サラワク	インドネシア	その他
昭 40	8.85	5.60	2.72	0.34	0.08	0.11
41	11.10	6.72	3.42	0.69	0.13	0.14
42	12.47	7.18	3.74	0.88	0.34	0.33
43	13.15	7.32	3.59	1.24	0.73	0.27
44	15.69	8.19	3.92	1.26	2.06	0.26
45(1~8)	11.23	5.09	2.50	0.66	2.87	0.11



表 8 45.46年の木材需供見通し すべて素材換算で単位千立方メートル ( )内は前年比

	45 年		46 年	
	数量	前年比	数量	前年比
△需要総計	101,440	(106.1)	105,930	(104.4)
製材用	61,000	(102.5)	62,500	(102.5)
バルブ用	25,000	(113.8)	27,100	(108.4)
合板用	12,300	(116.1)	13,500	(109.8)
その他	3,140	( 90.4)	2,830	( 90.1)
△供給内訳				
国産材	45,850	( 97.9)	44,950	( 98.0)
輸入材	55,590	(114.0)	60,980	(109.7)
輸入材依存率		54.8%		57.6%

(林野庁)

表 9 昭和45年に於ける南洋材対日輸入推定量 (100万立方メートル)  
(三井物産私案 古賀木材部次長)

産地別	輸 入 量	構 成 比
フィリピン	7.75	38.8%
マレーシア	4.00	20.0
インドネシア	2.00	10.0
その他	0.15	0.7
計	1.15	30.7
インドネシア	5.60	28.0
その他	0.50	2.5
合計	20.00	100%

表 10 住宅建設5ヶ年計画 (第1期 41~45)  
(第2期 46~50)  
単位 1000戸 建設省資料による

年度	当初計画 (5ヶ年)	41 実績	42 実績	43 実績	44 計画	45 計画	計 含計画	第2期計画 (46~50)
公営住宅	520	77.5	87	93.5	108	113.5	479.5	790
公庫住宅	1,080	168	199	223	246	256	1,092	1,630
公団住宅	350	53	61	69	78	81	342	550
その他公的資金	750	107	118	122	158	169	674	830
公的資金小計	2,700	405.5	465	507.5	590	619.5	2,587.5	3,800
民間自力建設	4,000	686	764	791	890	1,000	4,131	5,700
合計	6,700	1,091.5	1,229	1,298.5	1,480	1,619.5	6,718.5	9,500

表 11 南洋材を原料とした商品価格

木材工業 No.284による

品 目	価 格 円/立方米	備 考
チ ツ プ	4,000円～ 4,300円	
下 級 製 材 品	18,000 ～ 26,000	
上 級 製 材 品	36,000 ～ 43,000	
ラ ン バ ー コ ア	36,000 ～ 43,000	
チ ツ プ ボ ー ド	36,000 ～ 86,000	1 枚10m/m 590円～1400円として
ハ ー ド ボ ー ド	41,000 ～ 50,000	1 枚3.5m/m 240円～290円として
型 枠 合 板	39,000 ～ 43,000	1 枚 792円～864円として
5.5 m/m 合 板	44,000 ～ 47,000	1 枚 410円～430円として
2.7 m/m 合 板	59,000 ～ 64,000	1 枚 250円～270円として

表 12 昭和50年度に於ける木材需給の対応 (昭和41年4月)

(100万立方米)

閣議決定事項による

需 要 量	{	製 材 用 及 び そ の 他 用	75.1 (0.4) ～ 78.2
		合 板 用	14.5 (7.4) ～ 6.0
		パ ル プ 用	31.2 (7.8) ～ 34.2
		計	120.8 (7.8) ～ 128.4
国 内 供 給 量		53.9 (7.8) ～ 65.3	
国 外 材		55.5 ～ 74.5	

( ) 内は工場廃材による木材チップの需要量

表 13 昭和50年の外材針葉樹・広葉樹別輸入量 (100万立方米)

林総協報告書による

	南 洋 材	北 洋 材	米 材 そ の 他	合 計
針 葉 樹	0	15.7	21.4	37.1
広 葉 樹	33.0	0.8	6.1	39.9
合 計	33.0	16.5	27.5	77.0